

学 位 論 文 要 旨

氏 名 馬場 訓子

題 目 幼稚園教育におけるチーム保育の実践と教師の専門職性

1877(明治10)年、日本で初めて開設された東京女子師範学校附属幼稚園の『東京女子師範学校附属幼稚園規則』を始まりとして、年齢別の学級制が幼稚園教育の基本とされ、1人の教師が1学級を担当する「一学級一人担任制」が一般化されてきた。しかし、社会や子育て環境の変化に伴い多様な保育ニーズが認められ、幼稚園全体の協力体制の向上や、きめの細かい指導の工夫が要求されるようになったこと等を背景として、1999(平成11年)の『幼稚園教育要領』にはチーム保育という用語が登場し、幼稚園教育におけるチーム保育の導入が推奨されるに至った。現在まで、幼稚園の現場では多様なチーム保育が実践されるようになったが、一方で学術研究においては、各地の幼稚園現場で実際に行われている多様なチーム保育の実態が把握されていない現状があると共に、幼稚園現場の教師から捉えたチーム保育がどのようなものであるかという研究の蓄積が不十分であった。そこで、幼稚園現場におけるチーム保育の現状の把握や、現場教師から見たチーム保育のための諸条件を明らかにする必要があるという課題が認められる。そこで本論では、チーム保育に関する先行研究の整理、及び幼稚園の現場教師もしくは現場経験者から得たデータを基に、チーム保育の実践と今後の課題を明らかにし、望ましいチーム保育の在り方を考察することを目的とした。

第1章では、第1節及び第2節において、[1] 幼稚園現場におけるチーム保育の広がり、[2] 保育実践におけるチーム保育の形態、[3] チーム保育が幼児に与える教育効果や影響、[4] チーム保育の実践における教師間の協働性、の観点から先行研究を概観し、今後の課題を整理した。また、第3節では、それらの学術的課題を本論において解決する上で、広くチーム保育の実践者から得たデータから接近することを示した。具体的には、幼稚園16園から得た質問紙調査(予備調査)のデータ、幼稚園160園から得た質問紙調査(本調査)のデータ、幼稚園の現場経験者に対するインタビュー調査やグループディスカッションのデータ、及びチーム保育を実践する園の現職教師に対するインタビュー調査のデータから考察を進めることを示した。

第2章では、第1節において、160園の幼稚園から得たデータからチーム保育が広く普及しつつある現状を明らかにし、本論が示す内容が幼稚園の現場に広く資することを説明した。第2節では、幼稚園の現場教師から見たチーム保育のキーワードについて4項目を特定し、それらの大部分が第1章で示した先行研究の精査に基づく学術的課題と合致することを示し、本論の着眼点となる学術的課題について現場教師の語りからも焦点化・共有化を行った。

第3章では、幼稚園現場の様々なチーム保育の実践内容について取り上げた。第1節では、多様なチーム保育の形態の収集と分類から、10のチーム保育の形態を明らかにし、各形態に見る特性や教師にとっての利点や教育効果を明らかにした。第2節では、第1節で示したチーム保育の10形態それぞれに関して、陥りやすい問題点及び望ましい運営方法を論じた。第3節では、チーム保育の円滑な運営に求められる園長による取り組みや、園長のリーダーシップの重要性を明らかにした。

第4章では、チーム保育に見る教師の協働性と若手教師の育成に焦点を当てた。第1節では、幼稚園の現場教師から見たチーム保育の協働性に関するキーワードについて6項目を特定し、チーム保育を実践する上で教師間の協働関係を成立させる要素について論じた。第2節では、第1節で特定した協働性の6項目のうち、現場教師が最も着目する内容である「教師間の共通理解」に着目し、共通理解の具体的内容として15項目を特定した。第3節では、第2節で示した共通理解の15項目について、チーム保育の実践者の立場から見た各項目に対する意識の高低や重み付けを明らかにした。また、教師間の共通理解の因子構造を示すと共に教師の類型化を試み、3つの教師群におけるチーム保育の経験度や他教師との協働力について論じた。第4節では、チーム保育が持つ若手育成機能について、熟練教師と若手教師の関係性に焦点を当てながら論じ、若手教師が成長する上でのチーム保育の利点や、熟練教師による若手教師の望ましい教育について明らかにした。

第5章では、第1節において、チーム保育に見る幼児に対する教育効果や影響について、現場教師から得たデータから4項目を特定しつつ各項目について論じた。第2節では、第1章から第5章第1節までの研究成果を基に、チーム保育における教師の専門職性において重要視される内容を論じた。また、チーム保育の今後の課題を示すと共に展望を述べた。